

クライアントの『語り』にみる時間 —時間意識の近代化・疎外からの救済と物語の変容—

内 藤 み ち よ

1. はじめに

心理臨床の中で、クライアント（以下、「CI」）の「語り」を聞いていると、ふと、現実の世界（面接室の外）とは異なるかのような「時の流れ」や「時間の運動」のようなものを感じることがある。例えば不登校生徒や、ひきこもり状態のCIらは社会的時間に取り損ね、全面的撤退状態にあるかのような。また「あの時、私の時計が止まった」と喪失体験を繰り返し語るCIらは、現実生活はそれなりに送りながら、内面には別の時間を抱え、その二重性に苦しんでいるかのような。我々は、「時計」によって刻まれる「時間」に基づいて、それをあたかも自明のこととして生活している。しかし、時にはその時間が単なる物理的な外的尺度ではなく、人の生き方や在り様自体を規定したり束縛するのではないだろうか。かつては自然の変化や人の営みと共に流れた時間は失われ、本来は生活を豊かにする手段としてあったはずの時計（時間）は、逆に実生活を意味づけ（例えば「12時になったから昼食にしよう」など）、人を管理するようになり、人間が支配され疎外されているのではないか？

そんな時間という要素を生活に組み込み、身体化した我々が自己の人生を語る時、それはどのような形で立ち現れるのだろうか。「自己についての物語は、言葉によって構造化された時間であり「物語」である。」（矢野2000）というように、「語り」に流れる時間は、「物語」という様式で捉えるのが適すると思われる。そして事象（エピソード）と事象をつなげていく際の不可欠なファクターである「時間」は、日頃は人々の意識の背後に退いていて、何らかの必要や危機（いわゆる臨床的問題）が発生した時、「語り」の中で様々な「その時」や「時間」として立ち現れてくるといえるかもしれない。CIがやり場のない様々な体験を語る時、社会的な時間の流れと、そことのズレが生じて、個別の内的時間とでもいうような世界が垣間見えるようだ。

また社会的な時間に沿った生活を送っていたり、再適応を果たすようになっても、内的時間の連続性は損なわれたままの場合、その回復を求めることが語りの目指す所のようにも思われる。筆者は、絶えず更新を要求する社会的時間から疎外され、分断されかねない体験（事象）を、内的時間の中で意味づけ連続性あるものにしていく能力のようなものが、人にはあるのではないかと考えるようになった。そこで、本論では、社会的な時間として「外的時間」を捉え、そこから疎外された体験が、個人の「内的時間」の中で意味づけ直され、連続性が回復されるプロセスを、CIが語り直し終結へと向かう面接の流れを通して吟味する。

2. 人間理解と「時間」

<現代人の時間意識>

現代社会において「時計」によって刻まれる「時間」は、過去から未来に向かって不可逆的に一方向に流れているものとして捉えられるが、日頃自明のこととして我々の意識の背後に退いている「時間」観念や意識は、時代や社会を超えて普遍的なものだろうか？時間の捉え方の文化・社会差を論じたレーヴィン（1997）は、「出来事時間」より「時計時間」に従い能率を重視し時間を厳守することは、「目標に向かって進歩する」という態度と密接に関係しており、西欧と日本が突出して「早くて正確」であったが、工業化していない国々では時間に対し、より無頓着だったという。また歴史的に見ると近代の時間意識は、直線的で不可逆なキリスト教的時間が世俗化したもの（アガンベン2007）で、始まりと終わりのある直線的な線分で表されたが、17世紀以降の自然科学の発展とともに、無限に上昇する直線に象徴される「進歩の理念」に裏打ちされるようになったという（三宅正樹2005、マッティオ1980）。現代の日本人の時間意識は、近代化によって形成され、近代以前のように、ある幅をもった緩やかな帯のようなものから、秒・分単位で区切っていく点としての時間や「前へ前へと進む時間」となり、国策として学校教育や工場労働、家庭生活に「時間厳守」「効率の良い時間の使い方」「時は金なり」の価値観が取り入れられてきたとされる（橋本、他2001）。

さらには日常生活の時計化に留まらず、人生までもがスケジュール化（進学準備、昇格体系、住宅ローン、老後の年金、生命保険など）され、現在への生き生きとした関心は希薄化して人生は貧しく単調なものとなるだろう。しかし「進歩の理念」が、人生を加速化しつづけ、いくら無限に我々を追いつけても、個人の未来の究極には「死」という逃れられない事実が待っており、人は「時間のニヒリズム」へと方向付けられる（真木2006）だろう。

以上の様に、時代や社会の規範として本論で捉える外的時間は、人々に絶えざる進歩を要求する圧力となると考えられたが、心理学においても、発達や問題解決の方向性などに取り込まれ、影響してきたのではないだろうか。いわゆる正常や健常、自己実現や適応の方向は、“今日より明日へ”というポジティブ・シンキング志向で向上を目指し、そうでない状態は遅滞や障害・停滞とされ、それらの達成・促進が教育や援助の目的とされてきたと思われる。しかし河合（1982）は、ある個人に自己実現の問題が強く感じられるその「時」のことをカイロスとし、時計によって測定できる不可逆の時間をクロノスと呼んで区別することは大切であると指摘した。心理臨床において、CIの「語り」に現れる体験を捉える際に、クロノロジカルな時間への適応だけでなく、カイロスの世界（本論の内的時間）の意義を考えることは重要であろう。

<心理学研究における「時間」>

心理学研究に「時間」という視点を取り入れる有用性を唱える都築ら（2007）は、人間が生きる時間は重層構造（生物的時間・社会歴史的時間・心理学的時間）であり、個人の心理的時間の在り様を「時間的展望」という概念として捉えた。そして人生における過去や現在や未来という心理的時間の調和や不調和や、人がそれらをどのように分節化し、連続させているかを吟味することが人間理解につながると示唆している。彼らはこれまでの心理学研究における時間の扱われ方を概観し、従属変数としてミクロな実験的研究（知覚や記憶など）や、独立変数としてマクロ

な研究（発達など）に「時間」は組み込まれてきたが、よりダイナミックな性質をもつ時間（「人生」など）は明らかではないとし、研究の方向は、個人の「ある時点における」といった人間の心理を時間軸上の一時点で切り取って、静止的に分析する研究から、縦断的に変化を追跡するような、複数の時点での時間を組み込んだ動的研究へと発展しており、時間に生きる人間の人生や意味の問題への着目がなされているという。

また「臨床心理学」を時間研究として読み替えると、人間が自分自身の過去の体験の意味を現在から捉え直すことで、いかにして未来に生きていくのかを研究することだとした。心理学研究に「時間」を導入することの意義は、個人がどんな枠組みを使って、どのように世界を構成し、人生を意味づけるのか、その原理を時間軸という視点から解明することにあるという。本論は彼らの指摘する時間の重層性を外的時間と内的時間として捉え、その調和不調和という視点から人間理解を試みることになるだろう。

3. 物語と人間の内なる時間

<物語と時間>

物語と時間の関係の解明を試みたリクールは、「時間は物語の様式で分節されるに応じて人間の時間となる。」（1983）とし、「人は、意味のない時間の流れを人間化するために、フィクションを要請する」（カーモード1966）、「『私は経験した』と述べる時、自分がかかわった出来事が明確な始まりがあり、そして展開部がつづき、さらに他の出来事との区切りとしての終局部からなる、一つの構造をもった物語として把握されたことを意味する。経験とは、構造化された時間であり、言葉によって分節化され構造化された物語なのです。」（矢野2000）このように、人間は物語の力によって生（時間）を構成しているといえるだろう。物語は流れ行く時間を分節し、経験を体制化することで、経験に意味を見出す為の原理を表すメタファーとして心理学に導入された（野村2002）とされるように、本論でもC1の「語り」における「時間」を捉える際、「物語」概念は有用であると思われる。

外的時間を、個人の参照枠となる「大きな物語」として捉えると、時間概念の歴史的変化が及ぼした影響は、17世紀以降、教会の時間支配が商人の時間（一元的・均質化され計量化できる時間）や無限に上昇する「進歩の観念」に取って代わられた（三宅2005）ことにあると思われる。神への信仰を失った人々は、「進歩の理念」への根拠のない信望を抱くようになり、近代社会とともに誕生した「自己」を意味づけるための「大きな物語」は、天地創造という「はじまり」から、最後の審判という「終わり」（「救い」）のある人生ストーリーから、無限に進歩し続けるという、「終わりのない」（「救い」のない）ものへと変容したといえるかもしれない。

<「語り」による物語の変容>

心理学領域における物語アプローチについて、河合（2006）は、「物語」という言葉は心理学の専門用語として一般に通用するものではないが、とくに心理臨床のパラダイムになっており、物語の概念は心理療法にとって重要であるとし、心理療法に訪れる人たちはとりわけこうした物語の発見を必要としている人（山口2001）ということに筆者も賛同する。しかし「物語アプローチ」を援用する際、野村（2002）が「心理療法において物語概念が使用されている現在の様相は、

語るという行為なのか、その行為によって算出された語りなのかなどに曖昧さがある」と指摘するように、CIの「語り」はその内容と、物語を形作っていくという「行為」としての側面から捉える必要があるだろう。

「語る」行為を通して、「人はその心理的時間の中で過去や現在や未来を行きつ戻りつしながら生きていく」（都築2007）が、それが困難なCIらは、過去が現在を占拠し、物語が展開せず膠着し「時間的に居着いた」（内田2000）状態にあるのかもしれない。彼らがそんな体験を語るとき、「誰にも話せなかった」とか、「もう済んだことだと、誰にも相手にされなかった」と訴えることが少なくなく、「語れない」「語る相手がいない」ことで、その体験はあたかもCIの内なる世界を浮遊しているかのようだ。

「語る」ことによって物語に変容が生じ、自己変容が可能になるという考えは、すでに精神分析の草創期においてその一端が見られる。北山（2007）は、精神療法の言語的な仕事は、「人生を語り、語り直す」ことで、古典的精神分析で言う過去の再編成であるという。分析者との関係における反復現象を活用して、人生の台本を読み取るのが転移分析であり、精神分析技法の基本であるとする。また個々人のライフスタイル（人生目標）診断と、その変容を目指すアドラー心理学に基づく心理療法（野田2006）では、個人の過去のエピソード（早期回想early recollections）とその変容が手がかりとして活用され（シャルマン、他1990、野田1989）、その個人の現在のライフスタイルが変わることで、過去のエピソードが変容するという。このように「語る」ことは、治療的效果をもたらす方法とされてきたが、本論では、「語る」行為によって、人間は「重要な生存戦略力のひとつである時間をいじる能力」（内田2000）を発揮しえると考えられる。

次いで「語る」行為によって生み出される内容に関してであるが、物語の内容が変われば単純にその「語る」自己も変容するといえるのだろうか？野口（2006）のいうように、「現在」が物語の結末となるように組織化され、一貫性が得られるのではあるが、「現在」が変わるたびに書き換えられねばならない。しかし一旦できあがった物語は、「支配的な物語」dominant storyとして、その後の「語り」を方向付けるとした。物語の内容の変化には自己変容を起こすといえるようなレベルと、そうでないレベルがあることを示唆した矢野（2000）は、物語構造は変わらず内容だけが変容するレベル（学習類型自己変容I）と、構造（自己システム）が変容する上位のレベル（自己変容II）があるとした。『モモ』（1998）の中で友人ジジが、時間に追われ創造的に語れなくなり、不特定多数の消費者向けに次々と量産した物語や、物語作成ソフトによってプロットの交換だけで機械的に量産される大衆小説などはレベルIで、いくら語られても空しいばかりだろう。それに対し、特定の誰かに向けて語られた物語は、昔話や喪失体験のように、同じ内容が繰り返されても喜びや悲しみが共有され、語り手や聞き手の自己の在り様も変わっていくだろう。内容の変化より、ジジにとってのモモのような、聴いて欲しい聴き手という他者の存在が、自己変容には必要な条件で、そんな他者との関係に支えられ意味づけが変わっていくことで、自己の在り様は変容するのではないだろうか。心理療法における物語生成の過程で、ThはCIの物語の形成に関与する存在として、両者の「関係性」の重要さが指摘される（河合、山口2001）所以であろう。

<物語の終わりと救済>

面接の中で語るCIらは、自らが抱えた果てしない苦しみ of 物語に、もう終わらせてもいいという「救い」を求めているかのように思われることがある。彼らの終わりという救いのない物語にとって、現在の「語り」から生み出される終結像は重要といえるかもしれない。

自己の物語が終わらず、救いのない状態が繰り返されることに関して、「自伝」の研究から有用な示唆がある。自伝は愛する人を失った喪からはじめられ、「失われた時」を発見して再生しようとする作業だとする石川（1997）は、「喪失体験」を作者が自己の歴史の中で承認しえない場合、その物語は破綻するか、中断（地下聖堂クリプト化）して（終われないで）いるとした。他方、体験を現在に連なる出来事とし、さらには孤独な喪が他者と共有可能なものとして普遍化が起こる場合、作者は「新しい生」を見出し、作品は終結しているとした。そしてこの様な自伝では、過去と現在、個人の時間と世界（他者）の時間が和解するという。

人が様々な（喪失）体験をクリプト化するのでなく、現在に連なる意味ある過去として位置づけ、さらには人類の歴史という物語にも連ねることができたなら、究極の「救済」が得られるのではないだろうか。過去の体験がクリプト化した物語というと、地縛霊や浮遊霊として描かれる、自らが死んだことすら気付かない、「救われない」「終わりのない」無限地獄のような苦しみ of 物語（『鬼』山岸2006）が連想される。それらは聴き手（多くは宗教者）を得、「語り直される」ことで救済され、成仏する（物語が終わり、その時が過去化する）。CIが内なる時間のある時点への居着いた状態から救われ、再生に向かう物語の生成に立ち会うThの役割は、古来の鎮魂に通じるのかもしれない。

自伝ジャンルが初めて誕生し、失われた時間が見出されなければならなくなったのは17世紀以降（矢野2000）で、人々が自己を語るための「大きな物語」が、倦むことのない「進歩の物語」に変容した時代であった。人々は個々の体験を「終わりの」みえない無限に進歩する時間の流れに沿って積み上げ続けねばならないとしたら、未来への見通しも立てられないだろう。過去への和解だけでなく、有限な人間が、「無限に上昇する」という外的時間の要請に脅かされないためには、未来に具体的な像を持ち（真木2006）、現在と未来との和解を図ることも必要だろう。このことは、面接（という物語）が終わる為にも、見通し（＝見立て）の重要性を示唆する。

4. クライアントの「語り」に立ち現れる、「時間」と変容—臨床事例より

これまでに見てきたように、現代人を規定する外的時間と個別の内的時間との矛盾を抱えたCIらの生きにくさを、本論では次の2つの状態に分けた。

①無限に上昇する進歩の理念という時間を内面化させた個人は、「死」によって終わる恐怖に脅かされながらも、終わりの見えない未来を目指して倦むことなく体験を語り続け、現在を更新していく。

②上昇する不可逆な直線のある時点で、内的時間が動かなくなって、そこから先に展開できずに居着いてしまい、社会的時間とのギャップを抱え続ける。

①に分類される典型的臨床例の一つには、いわゆる「タイプA」の人々（都築2007）が挙げられよう。彼らはある意味で上昇する時間に過剰適応しているといえる。その正反対に對置されるのは、「不安という風の来ない窪みに逃げ込み、時間よ止まれと念じてしゃがみこむ現象」（内山

1990)といわれるアバシー現象がある。本稿で事例として挙げるのは、いわばその両者の間に布置されるような「ひきこもり」や「不登校」を体験し、社会復帰を目指す者である。彼らの状態を内なる時間から捉え、

①「社会復帰したいが時計が進まない。現実が動き出さないと焦る青年たち—<社会の時刻表への遅刻物語>」—事例A、B)とした。

次に②に分類されると考えた事例は、それなりに社会適応しつつも、上昇する時間の流れから何らかのきっかけで自ら降りて、戻る資格がないと自己規定してしまい、進行する現実と内なる時間の停滞のギャップに苦しんでいる人々である。これはさらに以下のように分類した。

②-1「時計を止めた?『あの時』から私の時間は進めてはならない。母という『役割』ゆえの罪悪感を抱き続けた中年期女性たち—<女の時間』という物語>」—事例C、D)

②-2「自分の時計ではなく他者の時計で生きてきて、自分の人生を生きる自信を持ってない中高年期の女性たち—<やり直す時間はないという失望の物語>」—事例E、F)とした。

以下、具体的な臨床事例を挙げ、CIの語る物語に現れる「時間」状態を検証し、その変容と救済プロセスを考察する。

①<社会の時刻表への遅刻物語>

事例A (30代女性)「主訴：ひきこもりの時期があり、社会復帰した後の再適応に悩む」Aは、大学を卒業する頃に実社会の『男社会の時間』(Aの表現)が怖くなってひきこもるようになったが、身体的治療の必要から外出するようになり、同じ体験者の自助的グループに参加するようになった。そこである程度適応しつつも、次第に違和感を覚えるようになり、「彼女らの時間では遅い。もっと進まなければ」という思いから個人面接を受けるようになったのであった。面接の中でいつも「男社会の時間に適応できなくて、ひきこもった私は、社会に出直しても、それに追いつくことができない」「私には時間がないんです」「(ひきこもっていた間)時間を無駄にしたので、早く取り返さないと」と焦りを示した。しかし、焦るほど現状はAのシナリオ通り進まず、それで余計焦るという悪循環を見せていた。次第に自分がひきこもるようになった時に恐れていた「男社会の時間」に、また自分の時間を添わせようとしていることの矛盾に気づき、『自分時間』というものの意味や、それまでは嫌悪していた『老人の時間』に『私の時間』と共通するものを見出し肯定するようになった。一方で「これまで必要だった面接の中で流れる時間はもう私の生活のペースには合わない」と面接を『カウンセリングのサクセスストーリー』というようなシナリオに基づいて「終わらせ」ようとした。その筋書きは、「ひきこもりから脱したCIが、理想的なThとの出会いと面接によって、自分を取り戻し、やがて友人や恋人ができ、仕事にも就いて社会適応を成し遂げThと別れていく」というものであった。その『筋書き』はThも望む理想的なものだと考えていたが、「そんなことを本当はしたくない」自分がいたと告白する。Thもその筋書きが必ずしも理想のものだと考えていないことが分かり、台本を捨てることでThとの関係の再構築(依存からより対等な関係へ)を試みるようになった。カウンセリングを卒業してもThとの絶縁にはならず、自分の意思で再会してもいいと思え、自分の気持ちや考えを大切にできる時間ペースで生きることの重要性に気付いた。そして自分の過去を未来の長い進歩のシナリオで塗り替えるのではなく、少し先くらいの小さなタイムスパンで主体的に決めていく生き方

を考え、より現実的に模索するようになっていった。

事例B（20代男性）「主訴：不登校を体験した時期から躁鬱状態を繰り返し、社会参加ができず、同年齢の同性程度のことができなければと悩む」Bは、高校時代にうつ病を発症し、中退後、医学的治療を受けながら、社会への再適応を目指し様々な試みをし、その一環として来談したのだった。いつも同年齢の同性の平均像と比較しつつ「せめてこの年齢だったらこれ位はしていないと・・・」とそれができていない自分に自信が持てず、年齢だけは重ねていく日々不安を感じていた。年齢という尺度でいつも自分を測り、「年相応の」平均的な青年像に追いつこうとして、状態が良くなってくるとそれまで寝込んだ時間を挽回し、また寝込んでしまう前にできるだけ多くのことをしなければと、焦って行動することで無理が生じて落ち込む、という悪循環を繰り返した。やがて自分を追い立てては落ち込むことに伴う身体的苦痛にこり、スローペースでも寝込まない状態を維持した方が楽だと実感するようになる。そして頑張らないことにも意味を見出し、自分の中の年齢尺度の縛りへの気付きも語られるようになったが、果てしない物語は続いた。

考察①：彼らのように「ひきこもり」や「不登校」の体験者は、社会の時間（時計）への合わせにくさを体験し、そこから撤退せざるをえなくなって、それまでの「時間割」や「年相応の人生計画書」から離脱して、自分だけの時間の中（家庭）で過ごすようになる。真仁田（1990）は、学校というシステムの特徴の一つである「時間」の秩序（ex.「時間割」）をあげ、彼らは「時間」に対する対応を＜棄て＞たとし、学校へ行かない毎日の生活の中での心の内に流れる「時間」に注目する。社会から一旦撤退した彼らは、自分のためだけに、すべての「時間」を使い、傍から見れば怠惰で気ままな生活は、自分のための時間に生きようとする（真仁田1990）のだろう。歴史的にみても、近代における国民的な義務教育、「普通教育」の主要な機能（潜在的）は、教科内容自体より、時計的に編成され管理された生活秩序への児童の教育にあるとした真木（2006）は、現代の日本の母親たちが、一日のうちで我が子に最も多くいう言葉は「早く」であるという。強迫的に人生を加速化し続ける社会時間から撤退した者は、そこから解放され自分を取り戻しても、社会に復帰する際には、またその時間への再適応を目指すことになるのだろうか？事例Aのように社会時間をもう一度取り入れ、それに基づいて作り上げた「サクセス・ストーリー」を掲げても、それは破綻せざるをえなかった。内容は新しくなっても、質的变化のないかつて自分を追い込んだ物語は、それを「語り」続けるうちに、「こんなの嫌だ！私の時間じゃない！」と強く実感することで捨てられたのかもしれない。そして社会の中で生きていく、ささやかな「私の時間」を獲得していこうと思えるようになって、初めて「私の物語」は始まり、内的な時間も動き出すようになったのかもしれない。それに比べBは、悪循環を繰り返す度に身体的苦痛を感じ、その空しさをどこかで自覚しつつも、社会が求める人生物語に支配され、「万年浪人」のような終わりも始まりもない時間を抱えこんだままのようだ。

②－１＜「女の時間」という物語＞

事例C（50代女性）「主訴：子ども（女子中学生）の問題行動によって浮上した罪悪感」を抱くCは、面接の冒頭で、上の子らの子育てがようやく終わったと思った矢先、妊娠がわかり、

「この子ができたばかりに、もう10年捨てたと思ってしまった」ことへの罪悪感（そのせいで、子は問題行動をおこしたのではないか？）を語ることから始められた。そしてCは自らを責めつつ、「実母にも誰にも話せなかった」出産前後の周囲からの"傷つき"を語り続けた。やがて「止めた時（計）」は、子の成長（子が初潮を迎え大人になった＝子育てを終えた）と共時的に動き出した。子育ての中で封印し、実現しえなかった進学への思いを語り、「主婦・母親」という役割には不要だとされかねない学究心を取り戻していくうちに、Cの中の時計が動き出すかのようだった。あふれるばかりの好奇心や知的欲求を「実は」と語り続け、やがて「もう（時を止めた）棘を抜いていいね？」と生き生きとした表情でThの同意を求め、探究心を現実に見合った形で実現するようになっていった。

事例D（40代後半女性）「主訴：自分の中で収まりのつかない過去の体験を整理したい。」と来談したDは、結婚直後、婚家ではやっていけないと思い、家を出る決心をしたが、実母の強い説得で思い留まった。「婚家に居留まる為」子をもうけ頑張るも、やはり婚家での生活が耐えられず、「このままでは死んだように生きることになる！」と家を出た。しかし思春期に差し掛かった子どもたちは予想外について来なかったことから、それは「母親」として認められなかったからだと自責の念を抱いたまま離婚。離職して、新たな土地で新たな仕事を得て頑張るも、過重な労働条件に耐えられず、戻ってくる。しかしその時は、もはや「母」として戻る場も、以前の「専門常勤職」もない、安定した社会的役割や所属を持たない自分を見出すことになる。Dは、母でなくなった自分は、「女」である生き方を封印することで罪を償い、母をやめると同時に常勤職を失ったことも、その報いのようにとらえていた。しかし自分の過去を語り直す中で、それまで決めていた物語（「悪い母親の末路」）とは別の意味づけ（直接の世話ができなくても、信じることができる）を見出し、それまで排斥されていた「語られなかったこと」への視野を広げていった。当初の「救われない」物語に見られる内的時間は、家を出て以来会わなかった子と、勇気を出して再会することで「許された」実感を得て動き出し、自分の時間を希望をもって生きてもいいと感じるようになった。

考察②－１：一体、彼女らにとって、「生きる時間」「私の時間」とは何なのだろう？女性には「育児期」には「社会に関わる自己」が小さくなり、「母親としての自分」が大きくなる（都築2007）という。事例Cにみるように、育児期は、事例AやBとは異なり、本人の意志によらず社会的には容認された撤退だ。しかし育児を終えた後、いかに自分の時間を回復するのか、Cは社会的撤退を嫌悪した「罪悪感」から自分で決められなかったが、これは多くの女性に共通した課題であろう。また事例Dでは、子どもの自立という「時」を待たずして「自分の時間」を選んでしまっ、母親という役割を全うしなかった「罪悪感」や、離婚して子どもを置いてきた母親は母親ではないと世間からも批判されている（はず）という物語に縛られていた。さらにDは、母親や主婦としてだけでなく、常勤職という安定した身分からも一旦降りてしまった為、その後は非常勤という、その日暮らしで食いつないでいくしかなく、社会の継続的に上昇する時間や物語に反した者への罰のような現実が浮かび上がる。かつてフェミニストらによって、フロイト理論を始め、科学として客観的・中立的と考えられてきた心理学理論は、19世紀の家父長制度に基づく男性原理主導型であったと見直されてきた（しまようこ1985）ように、「社会的時間」や「外

的時間」といっても、事例Aのいう「男性社会の時間」「男の時間」として捉え直す必要があるかもしれない。また「人の一生」という物語が、「聖なる物語」として歴史的な拠り所とされたキリストの生涯の物語（生誕から受難と復活）は、「産み育てる」女性の人生を象る物語ではない。キリストの傍らにいつも寄り添う、聖母マリアたち女性は、子（であるキリスト）を待ち、受容し、聴き手としてキリストの時間軸上に見え隠れするだけだが、彼女らの在り様の方が、「維持・回復・反復・調整」という家事・育児における時間（都築2007）に符合するといえるのではないだろうか。

男性のように直線的に生きられない女性は、出産によって「子どもの時間」と共存する。そして子どもが自立の前に迎える思春期は、子ども側からは「第二の誕生」なら、母親にとっては「第二の出産」であり、事例Cのように、それまでの出産や子育てにまつわる「傷つき」を語り直し収める時（カイロス）に当たるといえるかもしれない。また、「母親」という役割を素直に受け入れられなかったという、スティグマを自らに課した彼女らのThを見つめる眼差しには、「生きる為とはいえ、罪を犯し、自分はもう人間ではない、鬼だ」といった地縛霊の鎮魂物語（山岸2006）に登場する地縛霊の叫びにこめられた、激しい嘆きと「赦されたい」という強い願望にも似た訴えがあったように思う。そして最初はThによる「赦し」の言葉を求めるかのようであったが、決して責めず見守り続ける聞き手としてのThという存在に支えられ、自らを「赦し」ていくことで過去を救済し、自分の時間の連続性を取り戻していったと思われた。

②-2 <自分にやり直す時間はないという失望の物語>

事例E（60代女性）「主訴：これまでの人生は母親の自己愛的な要求によって、ことごとく変更せざるをえなかった。母との関係を引きずるのか、他者との関係がうまくいかない」Eは、「愛された」実感がない自分に自信が持てないまま、強い母親の支配に従い「いい子」で続けた。そんな自分の中の縛りに気付きつつ、老々介護を引き受け続け、母の死を看取ってようやくその縛りから解放された。そのプロセスの中でThにじっくり話を聴いてもらうことから、「大切にされている」実感を抱くようになりつつあった。そしてある日、面接の直前に棘が刺さって、Thに刺抜きで抜いてもらった時、Eは、「ああ、こんなことを求めているんだ」と気付き、「満たされた」と実感したという。そこでは、現在の体験が過去（体験の無い体験）を、あたかも遡って満たしたとでもいえるような、不可逆に流れる外的時間では、ありえないような時間体験が起こったかのようなだった。老母の死によって物理的に自分の時間を持てるようになったEは、それまで何度も自分の夢を断念してきたが、また新たな夢に向かうようになった。新たに目指した方向は、Thと同じ道であった。その計画を話す時のEは、あたかも自分の進路を母親に相談する、思春期の少女のような恥じらいを見せた。夢の実現に向けて動き出したものの、加齢による身体的な困難にぶつかり、くじけそうになると、Thの元に里帰りし、気付かないうちに自己犠牲的になってしまう傾向や、進学後の結果ではなく、「今の自分」や自分の為に時間を使う生き方を大事にすることを再認識したのだった。

事例F（40代前半女性）「主訴：学歴に対する強いコンプレックスから、自分の人生は諦めたが、女兒を産んで自分の果たせなかった人生を送らせることで自己実現を図ろうという空想に捕らわれ、現実を肯定できない」Fは、「名前をいうのも恥ずかしい」ような高校を卒業し、「三流

以下」の女子大を出たという自分の学歴を卑下し、「まともに就職もできず」見合い結婚をしたという。子どもを持つには至っていないが、いつか女兒を生み、その子に自分の果たせなかった英才教育を受けさせ、自分の代わりに社会的に認められる人生を送らせられたらという空想的願望を抱いていた。面接では絶えず、自分の「終わった」ような人生や、「何の希望も見出せないような負け組」が多い居住地域の人々への嫌悪感を訴えた。しかし語り続けるうちに、未だ生まれてもいない「娘」の華やかな人生という物語の空しさを実感するようになった。また自らの過去の事実は変えられないが、新たな学歴を取り直すストーリーも語られたが、実現の困難さに立ち止まるしかなかった。しかし筋書きを変えるのではなく、現在の自分時間は、むしろ社会的価値が支配する時間に追われておらず、主体的な喜びを中心に生きる「高尚な時間」であることや、面接での時間や「語る」こと自体が、いかに得難いものであるかに気付いていった。

考察②-2：彼女らは、既婚者ではあるが子どもがいない点で共通しており、両者とも「妻」という役割を保持する限り、安定した生活を送っているともいえた。しかしEは実母に対し時間を使い過ぎて、自分のためにやり直す時間が少ないと失望し、Fは実社会では自分の人生は終わっているのでは、未生の娘の人生という空想の時間に生きようとして虚しさを感じるなど、いずれも自分の時間や人生を諦めていた。彼女らは、CやDのような「母」という、外的時間からの免罪符を持たないからか、進学して学歴を積み、成功するというAやBが縛られたサクセスストーリーに支配されていたといえるかもしれない。しかし、そうした上昇志向の物語を追いかけるより、「今の私の生きている時間」を日々享受することに意味を見出すことで、そんな呪縛から解放され、内的時間に生き生きした流れを回復させて行けたのかもしれない。

5. おわりに

本稿では、現代社会を支え成り立たせる「大きな物語」としての無限に上昇する「時間」に、内的時間が添えなくなった状態を①と②に分類して事例から検証した。①は、「大きな物語」に添うか否かが現実生活でも課題で、男性の比率が高い傾向にあるようだ（土川1990、都築2006）。②では、もはやその時間では捉えられない時間を生きる「女性の物語」という問題といえ、圧倒的に成人女性に多く、主流になれない物語は多様（枝分かれ）にならざるをえない。白井（1991）は、青年期以降の時間的展望の研究において、いくつかの性差を見出し、中年期の女性は他の時期の男女より時間的展望を持たず刹那主義的傾向が高いという。また大学生では就職までは男女差がないが、女性は結婚後、いくつかの転機や条件の変化によって進路が変わっていく枝分かれ式の展望になり、男性では職業的昇進と家族の形成・発達が並行して進む直線的な展望であるという。母となることで、外的時間から疎外され、子育てが終わっても、親たちの介護という時間をまた生きなければならない現代の女性は、自分の人生を主体的に直接生きることの困難さが示唆される。

男性原理のより優位な時間という大きな物語において、停滞や反復に見えるような「女の時間」や「女の物語」は、その価値は低められ、傍流（キリストの傍らに見え隠れする聖母マリアの人生）や、異端（「母」をまっとうできない回心前の娼婦だったマグダラのマリアの様にスティグマを背負った人生）として疎外されがちのように思われた。しかし「女の時間」や「女の物語」

における「語りきれない」物語は、事例でみたように、語り直される事で損なわれた内的時間を再生する。それは少し先といった「小さい時間」を大切に生きることの意味を見出したり、近・現代化した社会が捨ててきた「出来事時間」（育児の時間はそれに符合するだろう）や、廃れつつある「習慣・風習」（女正月などに見られる正統な年行事表には載らない時間など）の再発見に通じるのかもしれない。

またいずれの事例でも、Thに語ることを通して、個人が生きてきた過去と現在そして未来を語りの中で自由に行きつ戻りつすることで、それまで膠着していた物語を多様な物語に編み直す力を発揮するようになっていったのだが、そうした能力は、現実生活での時間と個人に固有の内的時間という二重性を生きる我々にとって重要な能力であると思われた。

自分の時間を膠着させず物語を再生するには、それ自体が物語となりうる心理療法のような「中間領域」として機能する場（猪俣2005）の有用性が呈されたが、外的秩序としての時間から離脱し、自分の時間を回復する何らかの「場」が必要なのであろう。その最たる「場」は「夢」で、「夢の中では時間が逆流する」とした内田（2000）は、「夢の文法」で叙される世界と、現実世界との行き来を日ごとに繰り返すことで、人間は人間性を再生するのではないかという。この行程は、倦むことのない進歩や進化ではなく、ただ繰り返すだけだというのが、かつて近代化と共に直線的時間が淘汰してきた昼と夜が循環する時代の時間を彷彿させる。上昇する時間の理念からは傍流化される「女の時間」や、自分の時間を回復する「夢」や「中間領域」、また物語が生み出すファンタジーの世界では、不可逆な外的時間とは異なり、時間が可逆的に流れるような、内的時間を疎外された現代人を救済する要素があると思われた。

そして個人の「語り」に流れる時間は単一ではなく、他者と共に生きる複数の時間、世代と世代を結び、個人と社会の歴史を構成するといったような、歴史性をも視野に入れることも重要（都築2007）だろう。例えば、戦争体験を次の世代に語り継いでいくことなどに見られるように、個人の体験が、個人史に留まらず共有され、人類の歴史という時間の中で生き続け、未来の世代の物語にも影響をもたらすのかもしれない。また自死や被害者の遺族の人々が語り合うことで救われることは、自伝の分析で見たように、孤立した物語が他者と共有されることで世界と繋がり、内的時間が再生されるのかもしれない。本論では個別の内的時間として捉えた世界は、社会や時代によって変遷していく外的時間の次元とは異った、人類に共有される普遍的時間のようなものと関連があるのかもしれないが、それらを検討することなどは今後の課題としたい。

参考・引用文献

- アガンベン,G.（上村忠男 訳2007）：幼児期と歴史 経験の破壊と歴史の起源 岩波書店
 エンデ,M.（大島かおり 訳 1998）：モモ 岩波書店
 石川美子（1997）：自伝の時間 中央公論社
 橋本毅彦・栗山茂久 編（2001）：遅刻の誕生 近代日本における時間意識の形成 三元社
 カーモード、F.（岡本靖正 訳 1991）：終わりの意識 虚構理論の研究 国文社
 北山 修（2007）：劇的な精神分析入門 みすず書房
 河合隼雄（1982）：ユング心理学入門 培風館
 河合俊雄（2006）：概念の心理療法 日本評論社
 猪俣 剛（2005）：心理学の時間 日本評論社

- 西本郁子 (2006) : 時間意識の近代—「時は金なり」の社会史 法政大学出版局
- 真木悠介 (2006) : 時間の比較社会学 岩波現代文庫 岩波書店
- 真仁田 昭 (1990) : 登校拒否児に流れる「時間」 児童心理,44(8)
- Mazzeo, J.A. (1980) : The idea of progress 研究社
- 三宅正樹 (2005) : 文明と時間 東海大出版
- 野口裕二 (2006) : 物語としてのケア 医学書院
- 野田俊作 (2006) : アドレリアン・セラピーとは何か? アドレリアンVol.52
- 野田俊作 (1989) : アドラー心理学トーキングセミナー アニマ2001
- 野村晴夫 (2002) : 心理療法における物語的アプローチの批判的吟味—物語概念の適用と運用の観点から 東京大学大学院教育学研究科紀要 42.
- 野村晴夫 (2006) : クライエントの語りの構造 臨床事例に基づくナラティブ・プロセスの検討 心理臨床学研究 24.
- レーヴィン, R. (忠平美幸 訳 2002) : あなたはどれだけ待てますか 草思社
- リクール, P. (1983) 久米 博 訳 : 時間と物語I II III 新曜社
- しま ようこ (1985) : 女性学的心理学批判 フェミニストサイコロジー 垣内出版
- Shulman, B.H.et.al.(1990) : Manual for Life Style Assessment Accelerate Development
- 白井利明 (1997) : 時間的展望の生涯発達心理学 劉草書房
- 都築 学・白井利明 編 (2007) : 時間的展望研究ガイドブック ナカニシヤ出版
- 土川隆史 編 (1990) : スチューデント・アパシー 内山喜久雄 他監修 メタルヘルス・シリーズ 同朋舎
- 内田 樹 (2004) : 死と身体 死んだ後の私に会おう—身体と時間 医学書院
- 山岸涼子 (2006) : 鬼 潮漫画文庫
- 矢野智司 (2000) : 自己変容という物語 金子書房
- 矢野智司 (2000) : 生成する自己はどのように物語るのか やまだようこ編 人生を物語る—生成のライフストーリー ミネルヴァ書房

(臨床実践指導学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2007年9月7日、改稿2007年11月30日、受理2007年12月12日)

The Time in Narratives of Clients: Modernization of Time Consciousness Needs Salvation for Vivid Life and Transfiguration of Narratives

NAITO Michiyo

In our daily lives time (consciousness) is usually at the back of our consciousness. However, it comes to the fore and appears in one's narratives when a mental crisis occurs. Modernization had assisted in the growth of the consciousness of time within an individual. The narration one's story endlessly signifies to him/herself, that he/she was restrained from creating a life story in his/her own way. Clients told (retold) their hopeless and miserable stories in order to reconstruct and conclude their life story. Having worked with a therapist, they displayed their abilities to remake stories and operate the rigid passage of time. Such abilities are considered to be very important for them to live a sufficient life and receive the Last Judgment without fear. Some cases of female clients show that a dominant story based on an idea of progress intends to push female time and stories aside from the main stream of their stories. This point should be considered and analyzed in a future research.